

## 看護学生のコミュニケーションスキルと自我状態との関連

新潟医療福祉大学看護学科4年・矢口やよい  
新潟医療福祉大学看護学科・阿部明美  
新潟医療福祉大学医療情報管理学科・高橋直樹

## 【背景】

看護師にとってコミュニケーションとは、人間の反応を鋭く見抜くことができ、そこから看護問題を抽出し、看護を実践する上で必要な基本的スキルであり、このコミュニケーションスキルの習得は必要不可欠である。

交流分析においてコミュニケーションは、P (Parent: 親), A (Adult: 成人), C (Child: 子ども) のどれかの自我から相手に刺激を加え、相手のP, A, Cのどれかの自我が反応することであり、自分の自我状態を示すエゴグラムを客観的に知ること、自分のコミュニケーション傾向の理解につながるといわれている。中村ら (2007) はコミュニケーションスキルの教育に役立てるべく、臨床実習中の看護学生3年生を対象にコミュニケーションスキルと自我状態の関連を見出している。今回、4年制大学に所属する看護学生4年生を対象に、先行研究と比較検討をすることを目的にコミュニケーションスキルと自我状態の関連を検討したのでここに報告する。

## 【方法】

4年制看護系大学に所属する4年生74名に対し、質問紙調査を行った。

調査内容は、①コミュニケーションスキル評価として、高鳥ら (1977) の「コミュニケーションにおける看護者の認識と表現に関わる要因」を参考に、中村ら (2007) が作成した4要因 (傾聴4項目、共感4項目、判断4項目、表出5項目) からなる17項目で、5段階のリッカート式 (「5点: 十分にできる」～「1点: 全くできない」) で評定を求めた。自我状態については、②東大式エゴグラム (TEG II) を用いた。

分析方法は、コミュニケーションスキル評価は、4要因ごとに合計点を出し、平均値と標準偏差を求めた。TEG IIは、5つの自我状態 (CP, NP, A, FC, AC) ごとに合計点を出し、平均値と標準偏差を求めた。コミュニケーションスキルと自我状態との関連は、積率相関係数 (Pearsonの*r*) を用いた。

対象の学生に対し、研究の趣旨と目的、記入の意思は自由であること、無記名で行うこと、得られる回答は統計的に処理し研究目的以外での使用はしないことを明記した文書を調査用紙に添付し、また口頭でも説明を行った。また、新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得た。

## 【結果】

データ回収率は73 (回収率98%) で、有効回答数は65 (有

効回答率87.8%) であった。

コミュニケーションスキル評価の総平均は、 $3.80 \pm 0.42$  であった。4要因の得点は、高い順に「傾聴」 $4.40 \pm 0.51$ , 「共感」 $3.91 \pm 0.62$ , 「表出」 $3.78 \pm 0.56$ , 「判断」 $3.11 \pm 0.60$  であった。エゴグラムの自我状態別の平均は、CP $11.2 \pm 4.6$ , NP $15.1 \pm 3.8$ , A $11.1 \pm 4.6$ , FC $13.0 \pm 4.1$ , AC $15.3 \pm 4.1$  であった。コミュニケーションスキル評価の4要因とエゴグラムとの関係については、「傾聴」とNPの間に正の相関 ( $p < 0.01$ ) がみられた。また、「判断」とCP・Aの間に正の相関 ( $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ ) がみられた。同様に「共感」とNP・FCとの間に正の相関が ( $p < 0.05$ ), 「表出」とA・FCとの間に正の相関 ( $p < 0.05$ ) がみられた (表1)。

表1 コミュニケーションスキル得点とエゴグラムの相関

Pearsonの相関係数	n=65				
	CP	NP	A	FC	AC
傾聴	0.112	0.408 **	-0.070	0.179	-0.009
共感	0.187	0.297 *	-0.062	0.279 *	0.035
判断	0.357 **	0.200	0.255 *	0.197	-0.149
表出	0.234	0.244	0.291 *	0.281 *	-0.100

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$

## 【考察】

コミュニケーションスキルの4要因のうち「傾聴」が最も高く、「判断」が最も低いという結果は、中村ら (2007) とも一致する結果であった。看護学生は患者の話を積極的に聴くスキルについてはよくできていると評価していた。一方「判断」は、高鳥ら (1997) も述べているように、判断力は知識や経験が反映してくるので、学生にとっては、他のスキルと比較して難易度の高いスキルとして低い評価につながったと考える。自我状態については、十河ら (1985) が調査した一般女性 (20~30歳) のエゴグラムよりもNP, FC, ACが高い傾向にあり、これは中村ら (2007) と同様の結果であった。コミュニケーションスキルと自我状態との関連では、NPと「傾聴」、CPと「判断」に特に強い相関がみられた。NPは受容的に相手を理解しようとする側面があり、このことが相手の話の傾聴につながっていると考えられる。CPは信念・価値観が強いという側面があり、このような側面が、状況や他者の反応を判断するスキルにつながっていると考えられる。

## 【結論】

看護学生のコミュニケーションスキルは高い順に「傾聴」「共感」「表出」「判断」であり、積極的に相手の話を聴くことはできているが、判断力は低く評価しており、これは、中村ら (2007) とも一致する結果であった。

自我状態は、一般女性と比較してNP, FC, ACが高い傾向があり、これは中村ら (2007) とも同様の結果であった。

コミュニケーションスキルと自我状態の関連については、受容的な側面のあるNPの高い学生は「傾聴」のスキルが、価値観・信念が強いという側面のあるCPの高い学生は「判断」のスキルがよりできていると自己評価していた。